

齊藤 愛 (1509034)

〈序論〉

○ 研究動機・研究目的・研究方法

ハンドボール競技は、スピードのあるゲーム展開や多彩なプレーが多くあり、その中でもシュートは、勝敗を大きく分けるという魅力がある。筆者はこれまで右サイドで活動してきたことから、特に右サイドシュートについての研究を深めたいと考えた。また先輩方の卒業研究の被験者となり技術を向上することができたこともあり、右サイドシュートの向上・習得にはどのような指導が適切なのか興味を持った。したがって本研究の目的は、まだ技の獲得には至っていない中学二年生の S 君が、右サイドシュートを身に付けていく過程を明らかにし、この技術の向上・習得にはどのような指導法が有効なのかを分析し、把握することである。研究方法として、2012年5月から12月の7ヶ月間、指導場面の様子をビデオ記録するとともに、エピソード記述を行い原資料とする。それらの原資料を全て編集し、モルフォロギ的に観察し印象分析を行い、特に変化のある部分を共同観察して抽出し、その上達過程における運動経過をマイネル(Meinel,K)の諸運動カテゴリーを用いて把握していく。その際、右サイドシュートの目標像を S 君と一緒に考え、その目標像により近づくために S 君の欠点の修正方法を明らかにしながら有効な指導法を検討していく。

〈本論〉

○ 事例研究と運動観察

「事例研究」とは、典型的事例の体験そのものに迫り、共感しながら間主観的に研究することである。その中で、相手に関与しながら観察する「関与観察」をして、研究者がどのように感じ、心揺さぶられたかを記録する「エピソード記述」を用いていく。

S 君の上達過程をマイネルの運動モルフォロギ的考察法によって他者観察の自己観察化を行う。その際、印象分析により運動現象のなかに現れる質的な諸徴表を諸運動カテゴリーを用いて捉えていく。印象分析を用いることで、全身の運動や部分的な動きの様々な側面や徴表を順に分析し、本質的な運動カテゴリー的把握へと導く。この時「共同観察」によって一人一人の主観的な視点から共通項を抽出することで、より間主観的客観の立場から運動観察することができる。この場合、本研究でより有効だと考えた諸運動カテゴリーは、「局面構造」、「運動伝導」、「運動リズム」である。これらを用いて、S 君の上達過程を運動構造の側面から明らかにした。

○ 右サイドシュートにおける技の理想像

「ボールゲーム指導事典」と「PLAYING HANDBALL」(Zoltan Marczinka)の二者を照らし合わせながら、右サイドシュートの理想像を運動構造の側面から「助走」、「準備局面」、「主要局面」、「終末局面」、「受け身」と5つの局面に分けて明らかにした。「助走」はゴールに対して最短距離でスピードに乗り、「準備局面」で踏み込み・踏み切りを力強く行いテイクバ

ックをすると同時に体を傾け、リリース時に力を伝導させる「主要局面」を経て、フォロースローの「終末局面」、勢いを受け止め倒れ込むという「受け身」についてそれぞれその成り立ちを具体的に記述する。

○ 目標像と実際の指導法とエピソード記述

S 君の実態と技の理想像を照らし合わせながら、S 君の目標像を動きの分節ごとに設定する。ここで、S 君の運動について習熟位相に沿って考えていく必要があるため「形成位相」の捉え方に基づいて、右サイドシュートの技術を『自分の技とした』きっかけとなった「コツ」について明らかにした。そして、7ヶ月間のビデオ記録を基に特に変化の激しかったエピソードを抽出し、モルフォロギ的に印象分析した結果、初回ではなんとなくシュートを打っていて「運動伝導」が上手く出来ていなかったが、最後の練習では「運動リズム」も上手く作られていて目標像にかなり近づくことができた。しかし、大会という場になると注意が拡散してしまい自分の技としたシュートが十分に打てていなかった。

実際に行った倒れ込みの練習の中で成果のあがった指導法は以下の通りである。

練習内容	結果
①、②「カーブダイビングシュート」の対面パス(1)、(2)	準備局面から受け身までの運動経過をスムーズに行うことを目的とし、右サイドシュートの「運動リズム」の「コツ」を掴んだ。
③一歩の踏み込みシュート	「運動伝導」に着目し、体を湾曲させてできた力をボールに伝え、倒れ込み、順次接地することでその勢いを受け止めるということを目的とし、体を湾曲させることが倒れ込んで受け身を取りやすくなるという「コツ」を掴んだ。
④着地踏み込みシュート(ボールなし)	ボールがないことで自分自身に意識を向けられることができたため、『どのような感じで自分の体を動かしているのか』と気付き、『どのように運動すれば「受け身」が上手くいくか』という「コツ」と掴んだ。
⑤2歩シュート	S 君の場合、強い踏み切り・踏み込みを行っても、一連の運動の中でのテイクバックやフォロースロー、受け身に注意を向け、目的であったジャンプを高くすることやボールへの「運動伝導」の修正には繋がらなかった。しかしこの練習を繰り返していくことによって、技を自動化させることができ、シュート技術の向上への手立てとなり得ると考える。

〈結論〉

諸運動カテゴリーを用いた上記①～⑤の指導法が有効だったため、練習を繰り返していくうちに S 君は「粗形態」の獲得に至ることができた。よって、①～⑤の指導法を行うことは右サイドシュートの技の獲得・向上に大きく影響すると言える。その際、運動を構造的に捉えることは、右サイドシュートだけに限らずハンドボール競技における様々なシュート、そして他の運動でも、初心者に限らず上級者でも技術の習得・向上に役立てられるものだと考える。そして指導にしていく上で、指導者自身が学習者の実態を把握し、共に課題を克服しながら、運動の習得の手助けとなるように、学習者に適した指導を取り入れることが必要である。

(参考・引用文献省略)